

後期無量寿經における聞名について

小林良信

〈無量寿經〉には現在五種の漢訳及び漢本梵本の合計七本があり、そのうち『大阿弥陀經』と『無量清淨平等覺經』がその成立次第及び内容から「初期無量寿經」と呼ばれるべきもので、残り五本が「後期無量寿經」と呼ばれ得ることは、ほぼ定説となっている。

本稿では「後期無量寿經」、特に『無量寿經』に説かれる聞名について考察を加えてみたいがそれに先立って「初期無量寿經」中で聞名がどのように説かれていたかを『大阿弥陀經』を中心として見てみたい。

聞名が「初期無量寿經」においても重要且つ不可欠な概念であったことは『大阿弥陀經』中の法藏菩薩が発願して、燃燈仏に淨土の行を問う説示の中に

令我後作仏時。教授名字皆聞八方上下無央数仏国。莫不聞知我名字者。

と聞名が説かれていることから明らかである。

〈無量寿經〉は法藏菩薩が大悲誓願を発して、淨土を建立

後期無量寿經における聞名について（小林）

し、その淨土に衆生を救済しようという内容から成り立っているが、法藏菩薩がいかに勝れた淨土を建設しても、そのような淨土があること、或いは淨土のありさまが衆生の側に伝わらなければ衆生の願生心を喚起しえない。前出の説示の中で、法藏菩薩が国土を莊嚴した後で、「自分の名前を八方上下無央数仏国に教授して、自分の名字を聞知せざることならしめん」と言っていることは、自分の淨業を衆生側に伝える手段として聞名が捉えられていると理解できるであろう。

聞名がこの説示の中で出てくるのは『大阿弥陀經』のみで、同じ「初期無量寿經」でも『平等覺經』には聞名の語はなく、「後期無量寿經」の中にも当該所に聞名の語が説かれるものは無いが、『大阿弥陀經』が『平等覺經』に先行すると考えられることから、この部分の聞名が諸仏称揚の願文中に説かれる聞名と内容的に同じであるために重複を避けて整理されたと見ることも出来よう。

次に聞名が説かれるのは第四願の諸仏称揚の願中に、

後期無量壽經における聞名について（小林）

使某作仏時。令我名字。皆聞八方上下無央數仏国。皆令諸仏。各於比丘僧大座中。説我功德国土之善。諸天人民。蜎飛蠕動之類聞我名字。莫不慈心歡喜踊躍者。皆令衆生我國。得是願乃作仏。不得是願終不作仏。

と出てくる。聞名が諸仏称揚の願中に説かれるのは、諸仏称揚の願が聞名を具体化するために成立したと考えれば至極當然のことである。つまり、衆生に聞名させるためには、衆生の前で阿弥陀仏の名前を説く者が必要であり、十方世界の諸仏が阿弥陀仏を称揚することによって初めて衆生の聞名が実現すると考えられるからである。

三番目に聞名が説かれるのは、第五願の三輩往生の下輩に相当する部分であるが、この部分に説かれる聞名は「後期無量壽經」の当該部分に見られるが、『大阿弥称揚經』と『平等覺經』及び「後期無量壽經」とでは同じ聞名でも内容的に異ると考えられる。その点については後述するが、『大阿弥称揚經』に限れば、聞名は衆生に願生心を発させるための契機となるもので、直接の生因であると考えられる三輩往生への導入になっていると見るべきであろう。

「後期無量壽經」に説かれる聞名説は二種に大別出来るが、一つは生因願内に説かれる聞名と、もう一つは他方国土の衆生に対する願とも呼ぶべき「後期無量壽經」になって増広された願中に見られるものであり、「初期無量壽經」の

ように諸仏称揚の願中には聞名の語を見い出すことは出来ない。

まず生因願内に説かれるものであるが、これを『無量壽經』によって示せば、第二十願に、

設我得仏。十方衆生聞我名号係念我國殖諸徳本。至心廻向欲生我國。不果遂者。不取正覺。

とあり、更に本願文以外ではあるが、諸仏称揚、念仏往生の願成就文に、

十方恒沙諸仏如来。皆共讚歎無量壽仏威神功德不可思議。諸有衆生聞其名号。信心歡喜乃至一念。至心廻向願生彼国。即得往生不退転。唯除五逆誹謗正法。

と聞名が説かれる、第二十願の聞名は『平等覺經』同様に聞名によって起る願生心が生因として捉えられていると考えられる。又、願成就文中の聞名は『無量壽經』の諸仏称揚の願文中に聞名が説かれないことを考えると、願文では聞名の語を省略しても成就文迄は省略するに至らなかったと見られる。又これが念仏往生の願と関することは、念仏往生の願の出自を示唆するもので興味深い。

次の他方国土の衆生に対する願中に説かれる聞名であるが、これらを以下に示すと、

設我得仏。十方無量不可思議諸仏世界衆生之類。聞我名字。不得菩薩無生法忍諸深総持者。不取正覺。

（第三十四願）

設我得仏。十方無量不可思議諸仏世界。其有女人聞我名字。歡喜信樂發菩提心厭惡女身。壽終之後復為女像者。不取正覺。

(第三十五願)

設我得仏。十方無量不可思議諸仏世界菩薩衆。聞我名字。壽終之後常修梵行至成仏道。若不爾者。不取正覺。

(第三十六願)

設我得仏。十方無量不可思議諸仏世界諸天人民。聞我名字。五体投地稽首作礼。歡喜信樂修菩薩行。諸天世人莫不致敬。若不爾者。不取正覺。

(第三十七願)

設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字至千得仏。諸根欠陋不具足者。不取正覺。

(第四十一願)

設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字。皆悉速得清淨解脫三昧。住是三昧一發意頃。供養無量不可思議諸仏世尊。而不失定意。若不爾者。不取正覺。

(第四十二願)

設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字。壽終之後生尊貴家。若不爾者。不取正覺。

(第四十三願)

設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字歡喜踊躍。修菩薩行具足德本。若不爾者。不取正覺。

(第四十四願)

設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字。皆悉速得普等三昧。住是三昧至千成仏。常見無量不可思議一切如來。若不爾者。不取正覺。

(第四十五願)

設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字。不即得至不退転者。不取正覺。

(第四十七願)

設我得仏。他方国土諸菩薩衆。聞我名字。不即得至第一第二第三

後期無量壽經における聞名について(小林)

法忍。於諸仏法不能即得不退転者。不取正覺。(第四十八願)

以上の十一願となるが、これらは全て「後期無量壽經」になつて増広された部分に属している。更に、これらの願は衆生の極樂への往生を予想しないという点では、従来の阿彌陀仏の本願とは全く趣を異にするものであるが、それぞれに聞名が出てくることは、阿彌陀仏の本願思想が、衆生が各自の世界に住したままで阿彌陀仏の威力の恩恵を受けることが出来るという、全く新しい展開を示すに際し、それを可能にする要素として聞名が用いられていることを示している。

一方、これらの本願の願成就文を見ると、生尊貴家、不復女身、住定供仏の三願を除けば残り八願の願成就文は存在するが、これら全て極樂の衆生に関するものとして説かれており、願文の趣旨と一致しない。このことは「後期無量壽經」が一旦は他方国土に阿彌陀仏の威力を及ぼせる方向で増広しながら、成就文では従来通りの極樂世界を中心とする考え方を要する迄には至らなかったと考えられよう。

以上のように見えてくると(無量壽經)における聞名が『大阿彌陀經』では生因願への導入として捉えられたものが更に「後期無量壽經」では他方国土の衆生へ直接阿彌陀仏の功德を及ぼす手段として全く新たな展開を見せていることを指摘できるのである。

(大正大学綜合仏教研究所研究員)